

## 歴史の一環を擔ふもの

塚 本 龍 晟

且て祖山に學んでゐた頃と同級生達で、小野智好君(現在鈴木)中澤要實君、櫻榮鍊靜君などがこの棲神にそれぞれ働いてゐたやうに思ふ。以上の諸君は同級生とはいひ乍ら皆私より二ツ三ツ以上の年齢だつた。而も小野君は主席で、中澤君これに亞ぐといふ秀才で、成績からいつても年齢からいつても私など齒がたゝなかつた。私と同輩の連中は、幡野勝造、渡邊義勇、成澤存朗、それに今は、本山に居る渡邊義照、同君は、私等の連中では大人しい方の本山でもあつた。それに現在、信行道場に頑張つてゐる長谷寛慶等であつた。昭和三四年頃のことどもを秋の夜長に想ひ起すと、いろいろ懐舊の情に堪えぬものがある。そして中等部も満足に仕とげず、三年半

ばで退學し、『彼奴は一體どうしてゐるだらう、英語だけは一寸いけたやうだつたが』と少々ばかり同級生たちの記憶を思ひはかつて、昨年、今は蘇州特務機關情報部にゐる宇佐美鍊昌君の熱情にほだされて、『碧葉』の手傳ひを少しばかりしたのが事の起りとなつて、熊谷海善君に、何か書けと注文されたのも盡きせぬ因縁と、有難く感じた次第である。我々祖山の同人中ではこの『棲神』に筆を執るものは名譽組である。さればこそ、過去二十年もの間、『棲神』誌上に名を連らねた人々は、卒業者中僅かなパーセンテージであることはいふまでもない。想へば自分が貴重なこの誌上を汚すことは、何といふ幸運であることか。

私が熊谷君から原稿用紙を受取つたのは、六月下旬であつた。以來七月八月と、都會の寺院には最も忙しい時季にも拘はらず、何かとつもない論文でもものしたいやうに考へ『回教と日蓮主義』とか『大陸の宗教としての本宗』とか『現今寺院の實狀と徒弟制度』とか恐ろしいやうなテーマを按じて見たが、こんなこけおどしの文章は次回にゆづることにして、今は、お目見得程度で、熊谷君の好意を謝するつもりである。

私がふだん書いてる文章は自分ながら俗臭粉々たるもので、とうてい、この光輝ある『棲神』に印刷されるものとは、凡そ縁遠い代物である。大聖人今日世にましまさば、屹度『法師の皮を着たる畜生也』と一喝されること必定で、内心忸怩たるものを禁じ得ない。

漢口へ、漢口へ、皇軍將兵のかけ聲が、すぐ其處のやうに感じられる。東洋平和の尊い礎石となる忠勇なる人々、然も、身近かな、半田清も、小崎龍雄も、宇佐美鍊昌も支那の土を踏んでゐるのに、自分一人のんべんなら

りと甘い境遇にほろ苦い感懷を味はつて居るのは、甚だ申譯ないことと思はれる。然し又、これは、大きな時の配置なのだ。この配置を無理に破つてはならぬ。自分も又、歴史の一環を擔ふものである。といふ考へまでは容易に行きつくのであるが、扱て如何にしてこの與へられた歴史の一環を擔ふべきかといふことに就いては、仲々回答が得られない。

お坊さんといふカストは、その昔し指導階級として尊敬と生活とが惠まれてゐた。それが明治維新を機として、コベルニクスの轉回を餘儀なくされて、形式的には兎に角、實質的には、社會制度的に、寧ろ從屬的な存在にすら没落した。われわれの悲劇はこゝに始まつたのであつた。今日この例を端的に上げれば支那事變によつて促されて出來上つた佛教聯合會の動きが、明白に物語つてくれる。お坊さん（われわれもかく呼ばれる）達の立上りの悪いこと、禪かつぎのそれに似て、一から十まで内務省の指令、各縣、學務當局のかけ聲によつて、左右をき

よときよと眺め廻してゐる圖は、大聖人が、種々振舞鈔の中で平左衛門を叱咤されて『あら面白や平左衛門が物に狂ふを見よ』と仰せられた時とかくやと思はれ、全く情けない。献金運動、國策線上のマラソンも、在家社會事業團體の驥尾に附し、殘飯ばかりあさつてゐる姿は、あさましい。各宗上層部は、それぞれ、確乎たる方針の下に行つてゐる仕事であるかも知れぬが、我が宗門だけは、あの自主的精神のない托鉢などは別な方法を採用出来ないものかと考へる。われわれ、若いものからいへば、上層部の権力者は、協力とか、統制とかいふ言葉をはき違へてゐるんぢやないかと思はれる。協力、統制といふことは、他人の風下に立つといふことではないと考へられる。過る日佛聯委員會の席上で、戦死者の戒名に殉の字を入れることを淨土眞宗が提議したのを、各宗とも一も二もなく賛成し協和の精神を發揮したのは、表面上頗る美談の如く見えたが、われわれは宗門の立場として、一應疑義を狭んでよいのではないかと不満に感

じたのであつた。然るところ、數日を出ずして、清水立正大學長が教學新聞紙上に於て、殉を排斥され、これに替ふるに忠を以てせよと叫ばれたのは、事の成否は別として、大聖人の氣魄が感ぜられて有難い極みであつた。それにしても、宗から出てゐる委員諸師は、全く老ひ込んだのではないかと疑はれるのである。かうした世にこそ、大聖人の積極的御人格の一面を具現して、他宗派をリードすべきではなからうか。

去る六月、宗門多年の懸案たる祖廟中心制度が、確立し、即日曠古の大慶典を奉行する幸福を有し得たのは、等しく感激に堪えないところである。然し、この慶事にしても、一部上層部の努力手腕ばかりで實現したのではない。歴史の力であり、時世の歸趨であることにより以上の實感が伴ふのである。大聖人の御言葉に仰げば『時のしからしむるに非ずや』である。然るを、これを自分等の手柄の如く誤算して、能事終りたるかの如く考へることは、萬々なきことを信じたものである。キリスト

教に於ける團結、回教發展の問題に、頭を回らすと、門宗に於ける八派合同は誰の目にも必須の事業たることを疑ふ餘地がない。然も現下の如き超非常時に際して、これに對する、懇談會さへ設けられないのが不思議に思はれる。然も祖山によつて統一せられてゐる我が日蓮宗がこれがイニシヤチウを取るべきことはいふまでもないことである。力の時代に於て、分裂區々たるものが指導權を把握することは覺束かない。況んや、大聖人の指導原理たる『先づ國家を祈りて須く佛法を立つべし』の御本意には猶遼遠の感をまぬがれないのである。國家を祈るといふことは大聖人以來宗門の生命である。この生命を枯渴して宗門はあり得ない。潑刺たる躍動こそ希望して止まぬものである。躍動なく形骸化された献金、物資節約が一體何の宗門の足し、國家の爲めになるだらうか。凡そ今日ほど宗門人のやり口が形骸化し、形式化し、被支配的、被指導的であつた事が宗門史上に且つてあつたであらうか。かくいへば高德、先輩のお叱りを受ける

か知らぬが、これが社會人の目に寫る宗門の實狀であるとするれば、どうであらう。こゝに於て私は、漸く興へられた歴史の一環を如何にして擔ふべきかの端緒を得たのであるが、その前に是非共行ふべきことは、宗門行政制度の革新である。例へば宗門に於ける人的要素の如きも極めて重大な問題である。年々歳々宗門學校卒業者に對する宗門のやり方は、果して能率的であらうか、護法愛宗の念に乏しいものはなからうか。刻苦して折角結實した祖廟中心制度もかゝる點から又々破綻を招來しないとは誰が保證出來ようか。意義ある祖廟中心制度をして、跛行的たらしめざるには、徒らに宗門當局が官僚化して、世紀の息吹きに鈍感であつていゝといふ法はない。全宗門是れ神經と化し、普く社會事象を敏感にキャッチして、大聖人の御本意をして、世紀の大宗教たらしめんとすることこそ、門下の最大理想でなければならぬ。

以上書いて見ると、大言壯語に似て甚だ氣恥しい。けれどもかうした考へは、若いものゝ誰れもが持つてゐる

のではないかと思ふ。それを、カイゼルのものはカイゼルに返せ式に、若いものゝ考へは、若いものにまかせて置いて果していゝものであらうか。今日、西園寺老公は若い近衛文麿の魂を愛し、ドイツはヒトラーの明日あるを猶期待し、イタリーは國家の前途を青年外相チアノに

ゆだねてゐる。ひとり宗門が、若いゼネレーションを虐たげてよいといふ理屈はあり得ない。  
更けて行く秋、燈下の下に宗門の因襲を心に惱みつゝ、空ろな氣持ちで書籍をめくる、若い學徒を想ひ浮べると惻々として悲哀が迫つて來る。

## 陣中隨想錄

小崎龍雄

戰地へ來てから一層内地に於て國民精神總動員が強固化されて來たと云ふ知らせを、誰からの便にも受けとることが出來、我々前線に在るものは何が無し身内の血が緊張するを覺へるのである。感激！我々を朝に夕に動かして行くもの其は凡てが感激の一語に包まれてしまふのではなからうか。云ひ知れぬ感激、その中に我々は既

に明日を約束してしまふのである。こんな簡單なこと、一往誰かは笑ふかも知れないが、戰地では難しいことや理屈は一切抜きである。感激の人生とは戰時の生活をそのまゝに表現して居る言葉であらう。

○ 上海の陣中では學友や、知人とも相當會ふことが出來